

第1回「福山働くもののセミナー」開催される

10月16日、『アベノミクスを検証する—アベノミクスで働くものの生活は本当によくなるのか?』をテーマに「福山働くもののセミナー」が開催されました。

今回のテーマであるアベノミクスを検証することは、安倍政権が引き続いてやろうとしている経済政策が、決して日本経済の活性化をもたらすものでないばかりか、労働者の生活を脅かすことにもなる危険なものであることを確認するためでした。報告者は、こういった趣旨を説明するために丹念な資料を準備し、参加者は配られた報告資料に目を通しながら、詳細な説明に熱心に耳を傾けました。

報告は、アベノミクスの三本の矢はすでに折れてしまい、まったく役に立たないにも係わらず、未だ道半ばであり、さらにアベノミクスエンジンを吹かすことで目的を達成することができるなどと吹聴しているが、実際にはまったくのデマゴギーであることが説明されました。実際、金融政策は常軌を逸したマイナス金利、財政政策は1000兆円もの赤字財政を招くまでになっていて、アベノミクスが日本経済・社会を救うどころか国家の破綻を加速する役割しか果たしてない事。労働者には実質賃金の低下や非正規雇用の増大など、労働者の生活と雇用をひどい状況に陥れていることが明らかにされました。



そして、安倍がしきりに言うところのデフレから脱却するためにまずもって2%のインフレを達成し、物価を上昇させるなどというのが、いかに無内容なものかがデフレとインフレの概念から説明され、インフレは好景気を意味するものではないし、デフレも不景気と同じ意味ではないこと。デフレが物価の下落を意味するのであれば、労働者はデフレに反対する理由はなく、インフレこそ労働者にとっては追加収奪であり、実質賃金の低下であることが確認されました。さらに、日銀による大量の国債保有は、将来の激しいインフレを招くことになることも説明されました。

また財政政策では、すでに天文学的ともいえる借金で国家財政は破綻しているのに、これ以上の財政膨張政策を続けるのは、一層の財政破綻を招くだけであり、今後、大幅な増税や社会保障の切り下げなど、労働者大衆に一層の大きな犠牲を転化することになる。そして、成長戦略の中身も法人税の引き下げはもとより、雇用・労働時間の規制緩和や外国人労働者の受け入れなど労働者への搾取の強化でしかないことが説明されました。

こういったアベノミクスが登場してくる背景には、日本資本主義が健全な生

産的資本主義から不生産的で金融的な資本主義の段階に移行していることがあり、国内で生産する商品輸出大国から海外に資本を投資して、海外の労働者を搾取して利益をあげる帝国主義と化した資本になっていることがあること。すなわち、アベノミクスとはインフレ経済、バブル経済、無責任な財政膨張主義であり、退廃し寄生化しつつあるブルジョア階級の政策そのものであると特徴づけられました。

最後に労働者は、アベノミクスに対置するものとして、野党の様なよりましな資本主義、健全な資本主義といった幻想ではなく、労働者にとって根本的な解決を求めるべきである。塗炭の苦しみを労働者に強いるしかない資本主義経済・社会の一掃こそを課題としていかなければならない。資本主義的な生産―分配ではなく、労働者の共同的な関係の下、社会主義的生産と分配の社会にこそ真の解決を求めるべきである。と締めくくられました。

労働者の問題を考える会 (I)